

キリスト教学専修

第二演習・2017年度前期******A. 予定** (同学年は五十音順)

第三演習室：

木曜日隔週・2コマ → 1コマ1人 (+火4時限目、5時限目も可能)

60分の発表+30分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

月日	担当者
5月16日	
5月23日	
5月30日	
6月6日	
6月13日	
6月20日	
6月27日	
7月4日	
7月11日	
7月18日	
7月25日	
8月1日	

B. 関連するプログラム

1. 研究室紀要の刊行：3月刊行
 - ・第二演習での発表 → 論文、書評、サーベイ
 - ・特別研究発表会：年2回、9月初旬と2017年3月中旬
 - ・学会発表の予行+書評・サーベイ
 - ・原則的には：大学院生全員が参加（博士後期課程だけでなく）

C. その他

- ・飲み物の準備：担当M
数種類の飲み物を準備する（種類はMで相談）。紙コップあるいはマイ・コップ。
- ・夏期の研究発表会の1日目は、食事会。

*研究の基礎としての書評・サーベイ***

- ・研究の条件：テキスト（書かれたものとはかぎらず）の厳密な読解
問題を的確に立てること（先行研究の分析・整理）
先行研究の全体動向+直接参照すべき研究の徹底的な検討
論証すべきテーゼの明確化とその説得的な論証

↓

- すぐれた研究をモデルにすること。書評の意義=訓練としての書評。
- ・「研究サーベイ論文」をまとめること →
実例： 矢内原忠雄研究についての研究サーベイ論文
岡崎滋樹「矢内原忠雄研究の系譜——戦後日本における言説」（『社会システム研究』第24号、2012年、223-262頁。<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/ssrc/result/memoirs/kiyou24/24-11.pdf>)
- ・博士後期課程の院生は、後期に「サーベイ論文」の報告を行うこと。

*書評に向けて***

書評：永本哲也・猪刈由紀・早川朝子・山本大丙編『旅する教会——再洗礼派と宗教改革』
新教出版社、2017年。

プロローグ

第1部 再洗礼派の誕生と受難

- 1 偽りの教えを説く悪魔——ルターの宗教改革と再洗礼派
- 2 ルターから逸脱する改革者たち——カールシュタット、ミュンツァー、再洗礼派
- 3 ツヴィングリの先を行く——スイス再洗礼派
- 4 1528年の聖霊降臨祭に世界は終末を迎える——南ドイツでの展開
- 5 財産のいっさいを共同体に供出する——モラヴィアのフッター派
- 6 地上に降り立った新しきエルサレム——1530—35年の北西ヨーロッパ・ミュンスター再洗礼派
- 7 信仰の徹底を目指して——心霊主義とメノー派の形成
- 8 忌避と破門をめぐる戦い——メノー派の分裂・統合の試み・アーミッシュの出現

9 自覚的信仰と予定——ジャン・カルヴァンと改革派の再洗礼派観

第2部 再洗礼派の諸相

- 1 「使徒的生活」を目指す改革者たち——中世後期の宗教改革と再洗礼派
- 2 メディアのなかの再洗礼派——ミュンスターの再洗礼派王国驚異譚
- 3 緩やかに根づくネットワーク——再洗礼派運動と都市
- 4 イタリアのテディカルたち——カトリックの牙城での宗教改革
- 5 信仰者のバプテスマのみを認める——再洗礼派とバプテストとの出会い
- 6 『アウスブント』——殉教者たちの記憶
- 7 『殉教者の鑑』——メノー派・アーミシュのアイデンティティの源泉

第3部 近代化する社会を生きる再洗礼派

- 1 「宗派化」の時代を生き抜く宗教的少数派——16～17世紀の「スイス兄弟団」
- 2 「忌避」に同意しない者は破門する——アーミシュの誕生
- 3 近世から近代を生き抜くメノー派——プロイセン、ドイツ、ロシア
- 4 フッター派の500年——財産共有と無抵抗主義を守りぬく
- 5 真の信仰は決して強制され得ない——シュヴェンクフェルト派の形成
- 6 自由な社会の市民として生きる——アメリカ、カナダの再洗礼派
- 7 伝統の保持、「世界」への順応——アーミッシュの教育
- 8 世界に広がる再洗礼派——アジア、アフリカ、ラテンアメリカへの宣教
- 9 戦後に生まれた再洗礼派教会——日本メノナイトとフッターライト

エピローグ——再洗礼派と宗教改革の500年

再洗礼派関連略年表

図版出典一覧

あとがき

執筆者略歴

地名索引

人名索引

1. 書評

宗教改革五百周年を迎える年に、さまざまな企画とならんで、宗教改革の本質に迫る意欲的な論集が刊行された。宗教改革後に誕生した再洗礼派の歴史の全体像を描く、日本最初の試みであり、少数者から見たもう一つの宗教改革史・キリスト教史の出版を、キリスト教研究に関わる者の一人として心から喜びたい。本書は、『福音と世界』における連載がもとになったものであり——私はその愛読者だった——、プロローグとエピローグ以外に収録された二四の論考は、一つ一つが連載サイズで決して長くはない。しかし、簡潔で内容の凝縮された論考が相互に結び付くことによって、多岐にわたる再洗礼派の歴史全体を鮮やかに浮かび上がらせている。日本語で読める再洗礼派についてのまとまった研究は最近稀になった感がするが——アーミシュは比較的有名——、読者は、宗教改革のもう一

つの歴史について、最新の研究に触れることができる（各論考に付された注や関連年表は有益である）。宗教改革に関心のある方にとって必読の一冊である。

本書は、次のような三部から構成されている。第1部「再洗礼派の誕生と受難」では、宗教改革後の再洗礼派誕生から、多様な諸運動を内包した初期の歴史が描かれる（一六世紀）。第2部「再洗礼派の諸相」は、再洗礼派のネットワーク（前史と空間的な広がり）、讃美歌集、殉教者列伝など、再洗礼派の具体的事例を取り上げ、第3部「近代化する社会を生きる再洗礼派」では、再洗礼派内の主要宗派形成以降の、17世紀から現代までの歴史が辿られる。読者は、宗教改革から近世・近代にかけての再洗礼派諸派の動向、すなわちヨーロッパから新大陸、そして全世界へと続く「旅する教会」に触れることができる。以下、本書の魅力的な内容の一端を紹介したい。

そもそも宗教改革とは何だったのか。それは、ルターの九五箇条の提題において突然はじまり、その影響の下、多様な仕方で展開された諸教派の総体なのであろうか。本書が提出する宗教改革理解は、これとは大きく異なっている。それは、宗教改革を突然起こった大事件ではなく、14世紀頃から16世紀初頭にかけての歴史的な文脈に位置する「長期的変化の一過程」として理解するという立場であり、それは唯一正しい宗教改革という見方の転換を迫るものとなっている。そこに提出されるのは、再洗礼派やカトリックも含めて、「それぞれのやり方で宗教改革を行おうとする人々」が存在したことであり、例えば、再洗礼派諸派、心霊主義者、反三位一体論者など、どれも等しく「宗教改革」だったのである。したがって、重要なのは、どれが正統でどれが異端かといったことではないことになる。

本書は、再洗礼派は、それ自体多様で流動的な運動を包括したものであって、「幼児洗礼を避け信仰洗礼を行うことについては一致していたが」——これが迫害に結びついた——、ほかの教えや信仰生活の仕方については必ずしも一致していなかったことを強調している。再洗礼派諸派においては、財産共有制や非暴力主義がかなり共有されているが、ミュンスター再洗礼派の場合など集団蜂起を行う事例も存在する。心霊主義への距離や忌避破門の評価も分かれている。最近では、再洗礼派については複数起源説が主流とのことである。

宗教改革後、ヨーロッパ社会は近世の国教会・宗派化（領邦や都市当局によって公認された宗派が国教会を形成し、その教義や儀礼に基づいて領内に宗派的統一を確立する）から信教の自由や市民的平等を認める近代国民国家へと移行してゆくが、この過程で、再洗礼派は多くの殉教者を生み出し、合同と分裂を繰り返しながらヨーロッパ各地を旅し、その一部はついには新大陸アメリカに到達する——現在、再洗礼派は世界各地に広がっている——。その間、再洗礼派も宗派的アイデンティティを確立させ、国民国家の秩序に適応していった。こうした再洗礼派の旅は、宗教と国家の関係を問い直す指標となり、土着化をめざす教会にとっても、旅する教会の記憶は共有すべき貴重な財産なのである。現代のキリスト教にとって、本書の意義はきわめて大きいと言わねばならない。

2. 文献

出村彰 『再洗礼派』（日本キリスト教団出版局、1970年）

『ツヴィングリ——改革派教会の遺産と負債』（新教出版社、2010年）